

## 助動詞臆見

市川 浩

平成二十七年三月二十三日 晴

文語の苑にて毎月文語體の文をものしけるに、最近口語體との差を感ずること多かり。當初は平安時代までの文章などは免もあれ、漢文訓み下し調の文語文などは現代文とさまで違ひなしと思ひをりけるが、對譯するにその差の大きなるに驚く。

この僧都、或法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。「とは何者ぞ」と人の問ひければ、「さる物を我も知らず。若しあらましかば、この僧に似てむ」とぞ言ひける。

これ徒然草第六十段、盛親僧都の逸話紹介の部分なるが、恰度八十字程のこの文章を現代語譯をして見む。

この僧都が、或法師を見て、しろうるりといふ綽名をつけた。「それ何ですか」と人が聞いた所、「そんな物は自分も知らないよ。萬一あつたとしたら、きつとあの法師に似てゐることだらうよ」と言つたといふ。

既に字數九十六文字（二十パーセント増）を算ふ。これ偏へに原文助動詞の多用（「けり」「三回」「たり」「まし」「つ」「む」「計七語）によるものにて、口語體にはこれらの語一つもなければ、傳聞、存續、反實假想、確認、推量など様々の心の動きを示す助動詞を一々具體的の表現に譯するを要す。大學入試など一々「けり」の譯出を求めば「綽名をつけたことがあつた」など更に字數膨れむ。

更に本質的問題として、西歐に發する近現代思想の表現あり。これ事實を貴しとし、彼の地の初等教育、事實と個人の評價との差異を明確に表現すべきを強調し、學術論文には形容詞の使用すら避くべしと云々。明治、大正の我が國知識人この思想を是とするも、絃上の如き助動詞多用の文之に相應せざるを痛感、かくて「口語體」の創出となりにけり。されば口語體は事實を近代思想に準じて記述するに勝るも特に日本人の心の動きを表現するにほ未完の感なしとせず。かくて「面白う侍りけり」は「面白かつたです（だ）」など未だ様にならず。

それかあらぬか、最近フェイスブック、ツイッターとて、書き言葉ならぬ文章以て互に意思を通じ合ふの流行に、昭和戦前既に口語體定着せるに手紙にはなほ多く候文殘存しつるを思ひ起すにつけて、口語體は日本人の對人生活に適應せむとして果せず、寧ろ歐米風の交際へと導くが如し。その先にあるは小學校に於ける英語必修に見る「國際化」なる文化的變貌にして、之を更に進めむか、敗戦國の言語とて、國連はもとよりアセアンさへ公用語と認めぬ日本語の絶滅への道坦々たるべきを憂ふ。

萩原朝太郎は自身の口語體詩語への不満を解決せんとして、遍歴を重ねる末に文語への回歸を果し、之を「日本への回歸」と名附く。今日「日本を取り戻す」掛け聲盛なるも、朝太郎の魂の叫びに耳を傾くるを願ふのみ。